

# 第二言語習得研究入門 —生成文法からのアプローチ

評者 鈴木孝明



生成文法理論に基づく第二言語習得研究の入門書は、翻訳を除けば、日本語で読めるものはこれまで無かった。この分野の先駆者であるリディア・ホワイトの解説書が出版されたのが一九八九年、その日本語訳が出たのが一九九二年である。以後、日本語で読めるこの分野の手頃な入門書は出てこなかった。待ち望まれていた類の書である。

本書には「入門」という名がついているが、単なる概説書ではない。一番の特徴は、三つの統語現象に関する研究に絞って、それらを詳しく解説し、議論を繰り広げていることであろう。通常の入門書の「広く、浅く」といった発想ではなく、あえて「狭く、深く」というスタンスをとっている。これは、ある意味ではこの分野に適した方法である。文法理論がわからないまま、上邊だけ学んで、も本当の面白さはわからない。そこで、特定

の統語現象だけでもよいから、それについてはある程度詳しいところまで理解した上で、習得研究を捉える必要がある。これをきっかけにして、統語理論全体を学んでいけばよい、という発想である。

本書で扱われている統語現象は、すべて英語に関してのもので、第3章「照応表現の解釈」、第4章「wh 移動の制約」、第5章「文主語の義務性」とこれまで頻繁に調査されてきたものである。最新の話題を最新の理論で、ということではない。どの章も、まず現象を記述的に捉えるところから入っていく。「あとがき」にあるように、本書は、日本第二言語習得学会 (JSLA) の夏期セミナーでの講義がもとになっている。よって、本書が読者として想定しているのは、セミナー受講者である学部上級生や大学院生である。自分の手でリサーチをしてみたい、統語理論が難しくて何から始めたらよいのかわからない、という人には絶好の入門書である。

(京都産業大学外国語学部/心理言語学)  
〔新曜社・A5判272頁・本体2800円〕

に読み進めることができる。その後に、日本語母語話者を対象とした第二言語習得研究がかなり詳しくまとめられている。本書が概説書でないという大きな理由は、先行研究の扱いが単なるまとめに終わっていないところにある。細部にわたる批評は、実験文の設定、調査方法、データ分析の方法、結果の解釈にとどまらず、得られた成果をもとにしてこの先どのような研究が必要なのか、といったことをまで及ぶ。読者は、この一連の流れから、仮説検証を基盤とした実証的なりサーチというものが、どのようなステップを踏んで進められるのかを学ぶことができるだろう。